

# 保育内容「表現」におけるグループ・ワークの探索的研究

- 新聞紙を用いた遊び探しの活動から -

## Exploring "Expression" in Childcare through Group Work

- Using Newspapers to discover various activities -

南谷 悠子

Yuko Nanya

### 摘要

本稿は、「保育内容演習（表現）」第1回目の授業において、筆者が新聞紙遊びを提案し、ふり返しシートの記述数が一番多かった「新聞紙を使った遊び探し」のグループ・ワークを分析、考察したものである。学生の相互作用の様相に着目しながら、どのように遊びをみつけたのか、遊びをみつける過程でどのような学びが生起されたのかを視点とし、分析した結果、安心感を伴った活動であり、学生同士の相互作用により遊びを創り出していたことがわかった。また、ひとりでは気づけなかったと思われる遊びや気づきが生まれ、互いに認め合いながら学びを深めていたことが明らかになり、「音」に着目した活動でないにもかかわらず、「音楽の構成要素」である「速度」への気づきも認められた。今回の活動は、誰かが何らかのアクションを起こすことから遊びが生み出される協働的で創造的な活動であったと考えられた。そして、学生が新聞紙と向き合い、手指を動かし、他者とかかわりながら遊びを創り出していたことから、深い学びにつながったのではないかと考えられた。

キーワード 保育内容 表現 グループ・ワーク 新聞紙 遊び 音

### ． 研究の背景と目的

筆者は保育者養成校において、「保育内容演習（表現）」を担当している。保育内容表現のねらい及び内容をふまえ、子どもが経験し身につけていく内容や指導上の留意点を理解すること、また、子どもの表現とは何かを理解することが到達目標である<sup>1)</sup>。演習形式であり、ペア・ワークやグループ・ワーク、発表の機会を多く設定し、学生が能動的に学修に取り組むことができるよう工夫している。第1回はオリエンテーションであるが、目的や目標、授業計画や評価方法を説明した後、新聞紙遊びの実践を行う。子どもは新聞

紙をどのように扱うのかを考えながら、新聞紙遊びの楽しさや面白さを体感する試みである。保育所保育指針の3歳以上児の保育内容「表現には、(イ)内容 いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ」とある<sup>2)</sup>。様々な素材にかかわりながら、感じ、考え、自分なりに表現していくことが子どもの豊かな感性を育むことにつながると考えられる。新聞紙は形状に可塑性を備えており、身体動作やそれに伴って様々な音が生み出される素材である。造形遊び以外にも、様々な遊びが創り出される可能性を秘めた素材であると考えられる。

新聞紙遊びの実践について、井戸(1998)は、学生の自由な発想から26の技法が出現したことを報告し、まず素材にふれて創意工夫をすることが、子どもと楽しむ表現や援助を考えることにつながると論じている<sup>3)</sup>。清水(2012)は、新聞紙による音探しから合奏を行った実践において、学生の音への気づきや遊びとしてのイメージの広がりについて述べている<sup>4)</sup>。また、清水(2013)は、新聞紙をふくんだ身近な生活素材を用いた音探しの実践から、学生が子どもの遊びや表現活動そのものを幅広くとらえることができ、発想の柔軟さや視点の広がり の獲得がみられたことを報告している<sup>5)</sup>。そして、南谷(2020)は、新聞紙遊びプログラムにおいて、学生が新聞紙の素材としてのよさや面白さへの気づき、多様性や協働性に対する気づき がみられたことや、保育への期待の高まりが認められたことを報告し、新聞紙遊びの意義を論じている<sup>6)</sup>。関連研究では、身近な素材を用いた音づくりについて、持田(2019)が、学生の多様な音の気づきについて言及し、身近な素材と身体を通してかかわることの重要性を論じている<sup>7)</sup>。

アクティブ・ラーニングの議論は盛んに行われ、研究も多岐にわたる。中央教育審議会の答申(2012)『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』において、アクティブ・ラーニングとは、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」とある<sup>8)</sup>。保育者養成校においても、グループ・ディスカッションやグループ・ワークを取り入れたアクティブ・ラーニング型の授業はしばしばみられる。しかし、保育者養成校の学生について、表現活動におけるアクティブ・ラーニングの効果を明らかにした研究は多くない。その中で、朝野(2010)は、音楽聴取と物語創作によるグループ・ワークにおいて、学生が対人援助職に必要な資質にかかわる気づきを得たことを報告している<sup>9)</sup>。大塚・三上(2016)は、壁面制作を通じた協働学習において、役割のローテーションにより、授業への参加意識や保育者視点の高まりがみられたことを述べている<sup>10)</sup>。また、表現活動のグループ・ワーク時の学生の様相を明らかにした研究はみあたらない。関連研究として、三森・香宗我部(2020)は、児童を対象とした異学年による歌唱活動のマルチモーダル分析を行い、異学年による活動の意義について、新たな関係性を作り出す力の育成と、その関係性をベースにして音楽的な能力を高めることにあると論じている<sup>11)</sup>。

本研究では、筆者が考案した新聞紙を用いた遊びの実践において、ふり返しシートから学生の記述数が一番多かった活動に焦点を当て、どのような気づきや学びが、どのように生起されているのかについて探索的に明らかにしたいと考える。グループ・ワークの活動においては、学生の相互作用の様相に着目しながら、どのように遊びをみつけたのか、遊びをみつける過程でどのような学びが生起されたのかについて明らかにすることを目的とする。

## ．方法

### 1. 調査対象と調査時期

2019年度入学の1年生と2020年度入学の1年生の後期開講科目「保育内容演習（表現）」（以下、「表現」と表記）の第1回出席者を対象とした。2019年度は41名（男性9名、女性32名）、2020年度は28名（男性4名、女性24名）、計69名（男性13名、女性56名）である。

調査時期は2019年9月及び2020年9月である。

### 2. 倫理的配慮

対象者に、研究目的や方法、結果の利用、プライバシーの保護について、研究のみに使用することを説明し、同意を得た。

### 3. 「表現」第1回の授業内容

「表現」の授業を始めるに当たり、シラバスを説明し、目的や目標、授業計画や評価方法を伝えた。また、保育者としての自分を常に想定して授業に積極的に参加すること、子どもが感じる楽しさを自身も感じ取っていくようにすることを伝えた。

第1回の授業では新聞紙のみを扱うこととする。以下に第1回の授業内容を示す。

#### 「新聞紙遊びの実践」

輪になってすわり、耳をすます

輪になってすわり、新聞紙をなるべく音をたてないように回す

筆者が新聞紙で音を出し（破る、丸める等）、学生はオノマトペで応える（新聞紙の方を見ない）

グループ（4～5人）で、新聞紙を自由にさわりながら、新聞紙を使った遊びをみつけ、「〇〇る」と動詞で発表する（遊びをみつけるためのヒントとして、「〇〇る」と動詞で発表することを伝える）

グループ (4~5人) で、新聞紙を自由にさわりながら、新聞紙を使った一番おもしろい音を考え、発表する

全員で協力して、大きな新聞紙バルーンをつくり、持って揺らしたり、くぐったり、最後は突き破って遊ぶ

片付け

自由記述によるふり返し

以上が「表現」第1回の授業内容である<sup>6) 12)</sup>。

なお、「輪になってすわり、耳をすます」、「輪になってすわり、新聞紙をなるべく音をたてないように回す」は、シェーファー・今田 (1996) の『音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション』からのエクササイズである<sup>13)</sup>。以下にエクササイズを示す。

ほんの少しのあいだ、すごく静かにすわってみよう。そして耳をすましてみよう。

ウォーミング・アップ1 出典：R.マリー・シェーファー・今田匡彦 (1996)

『音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション』春秋社 p.3

紙を一枚持ってきて、音をぜんぜんたてないように、その紙を部屋の中にいるみんなでまわしてみよう。思ったよりむずかしいよ。指が紙にちょっとでもさわったとたんに、もう音がするからね。

音のイメージを想像する 32 出典：R.マリー・シェーファー・今田匡彦 (1996)

『音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション』春秋社 p.45

#### 4. 調査方法

2019年度、2020年度ともに、「表現」第1回受講後の学生を対象に、授業の最後にふり返しシート (A5版) を配布し、自由記述によるふり返しを記入させた後、その場で回収した。ふり返しを記入したレポート用紙は、筆者が読んだ後コメントを記入し、フィードバックをするために記名式で行った。

2020年度の「表現」受講者については、活動の様子をビデオカメラで記録した。また、グループ・ワークにおいては、ランダムに抽出した2グループについて、ビデオカメラで撮影した。そして、そのグループにICレコーダーを渡し、活動の様子も記録した。

#### 5. 分析方法

まず、「新聞紙遊びの実践」において、ふり返しシートから、どの活動の記述かをまとめ、学生の興味関心の所在と傾向を探り、一番記述数の多かった活動を対象とした。分析ソフトウェアとして、マックス・プランク心理言語学研究所が開発した「EUDICO Linguistic Annotator」 (以下、「ELAN」と表記) を用いた<sup>14)</sup>。グループ・ワークにおいて

は、発話の他に、ノンバーバルな相互作用が考えられたためである。ELAN を用いた表現活動の研究としては、三森・香宗我部 (2020) の研究が挙げられる。この研究は、異学年による歌唱活動において、児童の様相を分析し、教育的意義を考察したものである<sup>11) 15)</sup>。

本研究においては、ELAN (version5.9) を用い、学生の活動時の動画データと音声データを同期させ、発話や身体的な行為をふくめた多層的な注釈を行い、マルチモーダル分析を試みた。学生の相互作用の様相に着目しながら、どのように遊びをみつけたのか、遊びをみつける過程でどのような学びが生起されたのかを視点とし、分析を行い、考察した。

## ．結果と考察

「新聞紙遊びの実践」において、学生の自由記述によるふり返りを、筆者が一文に切片化し、どの活動についての記述かをまとめた (表 1)。なお、記述内容がどの活動のものなのか判別できないものは除いた。

表 1 学生の自由記述によるふり返り

活動内容	記述数
輪になってすわり、耳をすます	8
輪になってすわり、新聞紙をなるべく音をたてないように回す	7
筆者が新聞紙で音を出し (破る、丸める等)、学生はオノマトペで応える (新聞紙の方を見ない)	30
グループ (4~5 人) で、新聞紙を自由にさわりながら、新聞紙を使った遊びをみつけ、「○○る」と動詞で発表する (遊びをみつけるためのヒントとして、「○○る」と動詞で発表することを伝える)	60
グループ (4~5 人) で、新聞紙を自由にさわりながら、新聞紙を使った一番おもしろい音を考え、発表する	34
全員で協力して、大きな新聞紙バルーンをつくり、持って揺らしたり、くぐったり、最後は突き破って遊ぶ	26
片付け	1

\* 回答数計 166 \* 重複回答あり

学生の自由記述のふり返りからは、活動 の「新聞紙を用いた遊び探し」が最も多い記述数であった。この活動はグループ・ワークであり、所要時間は約 15 分であった。また、ランダムに抽出した 2 グループは、いずれも 4 人のグループであった。「新聞紙を用いた遊び探し」について分析を行ったところ、学生の相互作用の様相や、遊びのみつけ方について、特徴的ないくつかの事例が認められた。以下に事例を示す。なお参考までに、音声データから得られた音を筆者が擬音で示した。

事例 1：活動の始まり

- 001 (A)：「新聞紙で遊ぶ」  
002 (B)：「はたくみたいな」  
003 (C)：「はたく？」  
004 (D)：「るでしょ？」  
005 (B)：「あ、違うわ、るでしょ？」  
006 (D)：「破る 」  
007 (B)：「めくる 」  
008 (A)：新聞紙を持ち、上下に動かす (ガサガサガサ)  
009 (C)：「あ、それを見つけない？」  
010 (B)：「そうそう、破るって書けばいい」  
011 (D)：「破る 」  
012 (C)：新聞紙を上下に揺らす (パリパリパリ)  
013 (D)：「破っていい？」  
014 (B)：「いいよ」  
015 (D)：新聞紙を両腕を伸ばして勢いよく破る (ピリッ)  
016 (グループ全員)：大きな笑い声

事例 1 は、活動の冒頭部分である。活動内容の確認 (001～005) で始まり、学生 D が「破る」と遊びのアイデアを出すと (006)、すかさず学生 B が「めくる」と違うアイデアを出していた (007)。学生 C は、一連の流れから活動内容を軌道修正し、共有することができていた (009)。008 から新聞紙をさわり始め、身体の様々な動きを伴いながら、様々な音が聞こえだす (008、012、015)。手探りで始まった活動であったが、学生 D が新聞紙を思い切り破ったことで、大きな笑いが起こった (015、016)。大きな笑いが起こったことで緊張が和らぎ、学生に「これでいいんだ」という安心感が生まれたと考えられた。安心して表現できる下地ができたことにより、この後、新聞紙を用いて、様々な表しができるようになっていったのではないかと推察される。

事例 2：気づきの様相

- 001 (A)：新聞紙を破る (ピリッ)  
002 (B)：「うん」  
003 (A)：新聞紙を破る (ピリッ)  
004 (C)：新聞紙を下向きに持ち、揺らす (ピラピラピラ)  
005 (B)：新聞紙を破る (ピリッ)  
006 (B)：「なんだっけ？ちぎると破るは違う？」  
007 (D)：「ちぎるは」  
008 (A)：「ちぎるはちっちゃいんじゃない？」  
009 (B)：頷く

事例 2 は、気づきの様相である。学生 B は、グループの学生が新聞紙を破るのを見て、自身で新聞紙を破りながら、疑問が生まれたようであった。006 において、言語化できたことから、気づきが明確になったと考えられる。学生 B の気づきに対して、学生 D と学生 A が応答し (007、008)、学生 A の応答により、学生 B は頷いていた (009)。一

連のやりとりから、グループ内で、「ちぎる」と「破る」は「違う」ということが共有されたと考えられる。

事例3：認め合いながら深まる活動

- 001 (A)：「丸める」  
 002 (A)：新聞紙を両手で丸める (グワシャグワシャグワシャ)  
 003 (B)：「丸める、あ、いいね」  
 004 (C)：「丸めよう、じゃあ」  
 005 (D)：「はい」と言いながら、新聞紙を両手で丸め (グシャグシャグシャ)、投げる  
 006 (B)：「投げる」  
 007 (C)：「投げる」  
 008 (A)：笑いながら、「投げる」  
 009 (B)：新聞紙を両手で丸め (グシャグシャグシャ)、投げる  
 010 (C)：笑いながら、「ああ、いいよ」  
 011 (A)：新聞紙を両手で丸め (グシャグシャグシャ)、投げ、笑いながら、「わあ」

事例3は、互いに認め合いながら活動が進む様相である。まず、学生Aが「丸める」ということを思いつき、実際に「丸める」と発話し、新聞紙を丸めていた(001、002)。そこに、学生Bが学生Aのアイデアに賛同し(003)、次に学生Cが、「丸めよう」と発話していた(004)。そして、実際に学生Dが新聞紙を丸め、さらに「投げる」という行為を加えていた(005)。新たに加わった「投げる」行為を味わうかのような発話がみられ(006、007)、実際に遊びながら笑い声も出ていた(008、010、011)。また、手指を動かしながら、感覚的に身体動作を伴って動いた結果(005)、その動作を他の学生が言語化していた(006、007、008)。この事例から、学生同士の相互作用により遊びをみつけ出していたことが明らかとなった。

事例4：音楽の構成要素への気づき

- 001 (A)：「あっ、束ねる」  
 002 (B)：「はい、束ねて」  
 003 (C)：新聞紙をじゃばらに折り (グシャグシャグシャ)、破る (ピリッ)  
 004 (D)：「ゆっくり折るとかはだめ？」  
 005 (B)：新聞紙をたたくように折る (バンッバンッ)  
 006 (A)：笑い声  
 007 (C)：笑い声  
 008 (D)：新聞紙を持ち、そうっと丸める (ガサガサ)  
 009 (B)：「速めにちぎる」  
 010 (C)：笑い声  
 011 (D)：「これと、これは違うよね？」と言い、新聞紙を勢いよく破る (ピリッ)。  
 012 (C)：笑い声  
 013 (D)：ゆっくりと破る (ピリリッ)  
 014 (B)：「速めに、速めにちぎる」  
 015 (B)：新聞紙を勢いよくちぎり (ピリッ)、ぐしゃぐしゃにする (グシャッ)  
 016 (C)：笑い声  
 017 (B)：新聞紙をゆっくりちぎる (ピリピリ)  
 018 (B)：「遅めにちぎる」

事例4においては、音楽の構成要素への気づきが認められた。学生Aが、「束ねる」ことを思いつき(001)、学生Cが新聞紙をじゃばらに折ることで束ね、破っていた(003)。一連の流れを見ていた学生Dが、「ゆっくり折る」はどうかと提案していた(004)。次に、学生Bは新聞紙を「たたくように」折り、学生Dは新聞紙を「そうっと」丸めていた(005、008)。学生Dの発話や動作は(004、008)、速度に関する対比の無自覚な気づきであると考えられる。そして、学生Dの「ゆっくり折る」に対して(004)、学生Bが「速めにちぎる」と応答しており(009)、「ゆっくり 速めに」という副詞や形容動詞を用いた速度に関する対比への気づきが認められた。さらに、学生Dは新聞紙を勢いよく破るときとゆっくり破るときでは「違う」と発話し、実践していた(011、013)。速度に関する対比の無自覚な気づきが自覚化されたと推察される。新聞紙を破るにも「速く」破るのと、「遅く」破るのとでは、身体動作そのものや、身体動作を伴って生み出される音の聞こえ方が「違う」ということであると考えられた。その後、学生Bは、学生Dの速度への気づきを模倣し、確認していた(014、015、017、018)。

事例5：協働する遊び

- 001 (A)：新聞紙を棒状に折る (ガサガサガサ)  
 002 (A)：「これやろう？こうやって持って」  
 003 (B)：笑いながら、「いいよ」  
 004 (B)：新聞紙をつかむように棒状にする (ガサガサ)  
 005 (C)：「あ」  
 006 (A)：「大丈夫？」  
 007 (B)：「どっちが強いか」  
 008 (A、B)：棒状にした新聞紙をクロスさせ、互いに引っ張る (ガサガサガサ)  
 009 (C)：笑い声  
 010 (D)：笑い声  
 011 (A、B)：互いに引っ張っていた新聞紙がAの方のみちぎれる (ガサーッ)  
 012 (A)：笑いながら、「弱いなあ、これだめだ」  
 013 (A)：新聞紙を棒状に折る (ガサガサガサ)  
 014 (B)：「Aが弱いよ」  
 015 (A)：「ちょっと待って、頑丈につくるから」  
 016 (A)：新聞紙を棒状にたたくように折る (バン、バン、バン、バン)  
 017 (D)：「全然頑丈じゃないよ」  
 018 (A)：笑いながら、新聞紙二枚を棒状にし (ガサガサガサ)、「二重にするからね」  
 019 (D)：「すごく大きくして」

事例5は、活動中盤にみられた協働する遊びの様相である。学生Aが遊びを提案し(001、002)、学生Bが応答していた(003、004)。学生Cも遊び方に気づき(005)、学生Bの「どっちが強いか」という発話で、グループ内に遊び方が明確となり、共有されていた(007)。新聞紙を棒状にしたものをクロスさせ、学生Aと学生Bが引っ張り(008)、学生Aの新聞紙がちぎれる(011)。その後、学生Aはより頑丈な新聞紙づくりを試み(013、015、016、018)、再び引っ張り遊びへとつながっていた。手指を動かし、新聞紙をさ



わりながら、協働する遊びを思いつき、学生同士で共通の目的を持ち、実践していた。その結果、楽しさを感じ、より楽しい遊びになるよう工夫していたと考えられる。

## ．まとめ

### 1. 総合考察

本研究では、「新聞紙遊びの実践」の中から、ふり返しシートにおいて、学生の記述数が最も多かったグループ・ワーク「新聞紙を用いた遊び探し」に焦点を当て、学生の相互作用の様相に着目しながら、どのように学びが生起されているのかについて分析した。その結果、安心感を伴った活動であり、学生同士の相互作用により遊びをみつけ出し、ひとりでは気づけなかったと思われる遊びや気づきが生まれ、互いに認め合いながら学びを深めていたことがわかった。「音」に着目した活動でないにもかかわらず、「音楽の構成要素」である「速度」に対する気づきもみられた上、協働する遊びも生まれていた。学生が手指を動かし、五感を働かせながら新聞紙という素材に向き合い、他者との関係の中で学びが深まっていたと考えられる。

スカーダマリア他 (2014) は、大きく2種類のタイプの授業に分けて、前向きアプローチで授業を進めていく必要性を述べ、知識とは教えられて学ぶものではなく、「創り出すもの」だという考えがもとになっていることを論じている<sup>16)</sup>。「新聞紙の遊び探し」は、学生が手指の感覚で実際に新聞紙をさわりながら、感じ、考える活動であり、遊びを創り出す活動であったと考えられる。頭で思いついた遊びを言語化し、行為として表現される場合もあったが、手指を使って新聞紙をさわり、自身の行為を言語化したり、他者が言語化していく場面もみられた。そして、他者が賛同し、遊びが広がったり、違った遊びが生まれたり、それらが合わさったような遊びも生まれていた。遊びが生み出される順序は、発話 表現ばかりではなく、表出 発話がしばしばみられた。まずはやってみることで、誰かが何らかのアクションを起こすことから遊びが生み出される協働的で創造的な活動であったといえる。

保育所保育指針3歳以上児の保育内容において、才 表現「(イ) 内容 いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ」の解説(2018)では、「自分なりの素材の使い方を見付ける体験が創造的な活動の源泉」と明記されている<sup>17)</sup>。井戸(1998)は、自分の手を通して素材とかかわる体験が、子どもと楽しむ表現や援助を考えることにつながると論じている<sup>3) 18)</sup>。新聞紙は形状に可塑性を備えており、身体動作やそれに伴って様々な音が生み出される素材である。子どもにとって新聞紙をふんだんに使えることはワクワクすることであり、ただ破るだけでも身体動作やそれに伴って生み出される音がおもしろいと考えられる。また、手指を動かし、創意工夫しながら、モノとのかかわり方や様々な事象への気づきが促されると考えられる。学生は、子どもが遊びを通して学ぶということ、子どもが感じる楽し

さを感じ取りながら、再構築できたのではないだろうか。活動中の学生は、動詞をリストアップしてから、新聞紙を使ってその動詞に当てはまるような遊びを探す様子がみられなかった。学生が、新聞紙と向き合い、手指を動かし、他者とかかわりながら遊びを創り出していたことから、深い学びにつながったのではないかと考える。

## 2. 今後の課題

今回の活動において、「音楽の構成要素」である「速度」に対する気づきもみられたが、学生の無自覚に思われる気づきを自覚化させ、全体で共有していく必要がある。保育所保育指針の内容の取扱い(2017)には、子どもの表現は素朴な形で行われることが多いため、保育者はその表現を受容し、意欲を受け止め、子どもが生活の中で様々な表現を楽しむことができるように留意する必要性が明記されている<sup>19)</sup>。子どもの表しはシンプルで素朴なものである。子どもの表しに気づき、認め、返していくことが保育者には求められる。また、表出に意味づけや価値づけを行い、子どものイメージをふくらませ、表現へとつながるような援助を行う必要がある。学生には、子どもの感じる楽しさを感じ取りながら、保育者視点も高めてもらいたい。このような複眼的な視点の学びが深まる授業計画を立て、実践していくことが今後の課題である。

### 【引用文献】

- 1) 『名古屋経営短期大学シラバス』(2020)  
[http://syb.nagoya-su.ac.jp/syllabus/html/2020\\_51130151.html](http://syb.nagoya-su.ac.jp/syllabus/html/2020_51130151.html) (2020年12月7日閲覧)
- 2) 『平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型こども園教育・保育要領<原本>』(2017) チャイルド本社 p.49
- 3) 井戸裕子(1998)「新聞紙を用いた造形活動について 学生の造形技法の実態」『東京家政大学研究紀要』第38巻第1号 pp.63-68
- 4) 清水桂子(2012)「保育者養成校における身近な素材を用いた「音探し」の実践 新聞紙との対話から」『北翔大学短期大学部研究紀要』第50号 pp.33-40
- 5) 清水桂子(2013)「身近な生活素材を用いた「音探し」の実践過程 保育者養成における多様な表現活動に配慮した授業展開」『住まい・環境教育学会論文報告集』第10号 pp.33-44
- 6) 南谷悠子(2020)「保育内容「表現」における学生の意識変化の試み 新聞紙遊びの実践を通して」『名古屋経営短期大学紀要』第61号 pp.27-37
- 7) 持田葉子(2019)「保育者養成における学生の音への感性を育む授業実践 身近な素材を用いた音づくりにおける学生の学び」『聖和短期大学紀要』第5号 pp.19-26
- 8) 中央教育審議会答申(2012)『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』用語集 [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf) (2020年12月7日閲覧)
- 9) 朝野典子(2010)「音楽聴取と物語創作によるグループワークにおける学生の気づき」『夙川学院短期大学教育実践研究紀要』第2号 pp.35-39
- 10) 大塚習平・三上慧(2016)「保育者に必要な協働する力の育成 協働学習「壁面制作」を通して」『湘北紀要』第37号 pp.53-69
- 11) 三森聡・香宗我部琢(2020)「音楽科学習における児童のポジティブ感情の共有化がもたらす教育的な意義 異学年による歌唱活動での児童のマルチモーダル分析」『音楽教育実践ジャーナル』vol.18 pp.112-119

- 12) 前掲 南谷悠子 (2020) 「保育内容「表現」における学生の意識変化の試み 新聞紙遊びの実践を通して」『名古屋経営短期大学紀要』第61号 pp.27-37
- 13) R.マリー・シェーファー・今田匡彦 (1996) 『音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション』今田匡彦訳 春秋社 p.3、p.45
- 14) 細馬宏道・菊池浩平 (2019) 『ELAN 入門 言語学・行動学からメディア研究まで』ひつじ書房 p.2
- 15) 前掲 三森聡・香宗我部琢 (2020) 「音楽科学習における児童のポジティブ感情の共有化がもたらす教育的な意義 異学年による歌唱活動での児童のマルチモーダル分析」『音楽教育実践ジャーナル』vol.18 pp.112-119
- 16) M.スカーダマリア・J.ブランスフォード・B.コズマ・E.クエルマルツ (2014) 「知識構築のための新たな評価と学習環境」P.グリフィン・B.マクゴー・E.ケア (編) 『21世紀型スキル 学びと評価の新たなかたち』三宅なほみ・益川弘如・望月俊男訳 北大路書房 pp.77-149
- 17) 厚生労働省 (2018) 『保育所保育指針解説』フレーベル館 p.273
- 18) 前掲 井戸裕子 (1998) 「新聞紙を用いた造形活動について 学生の造形技法の実態」『東京家政大学研究紀要』第38巻第1号 pp.63-68
- 19) 前掲 『平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型こども園教育・保育要領<原本>』(2017) チャイルド本社 p.49